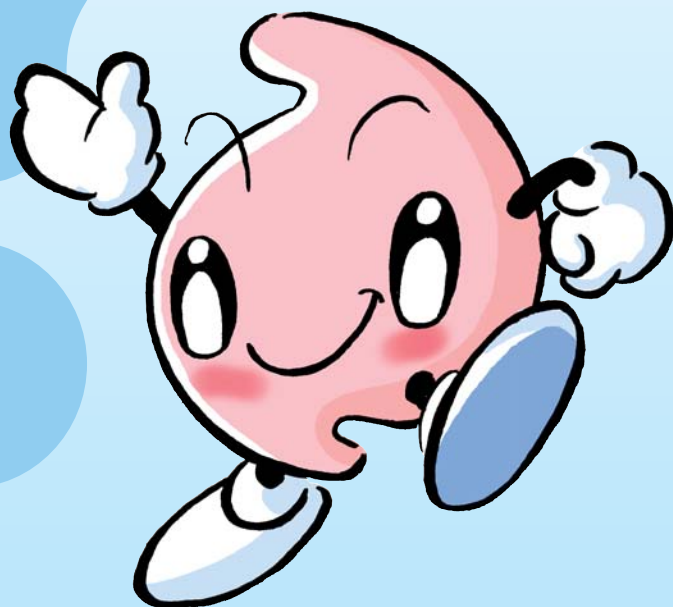


やくざいせいえん

薬剤性胃炎 を 知っていますか？



監修

大阪大学 名誉教授

川野 淳 先生

Q1



胃炎について教えてください

A

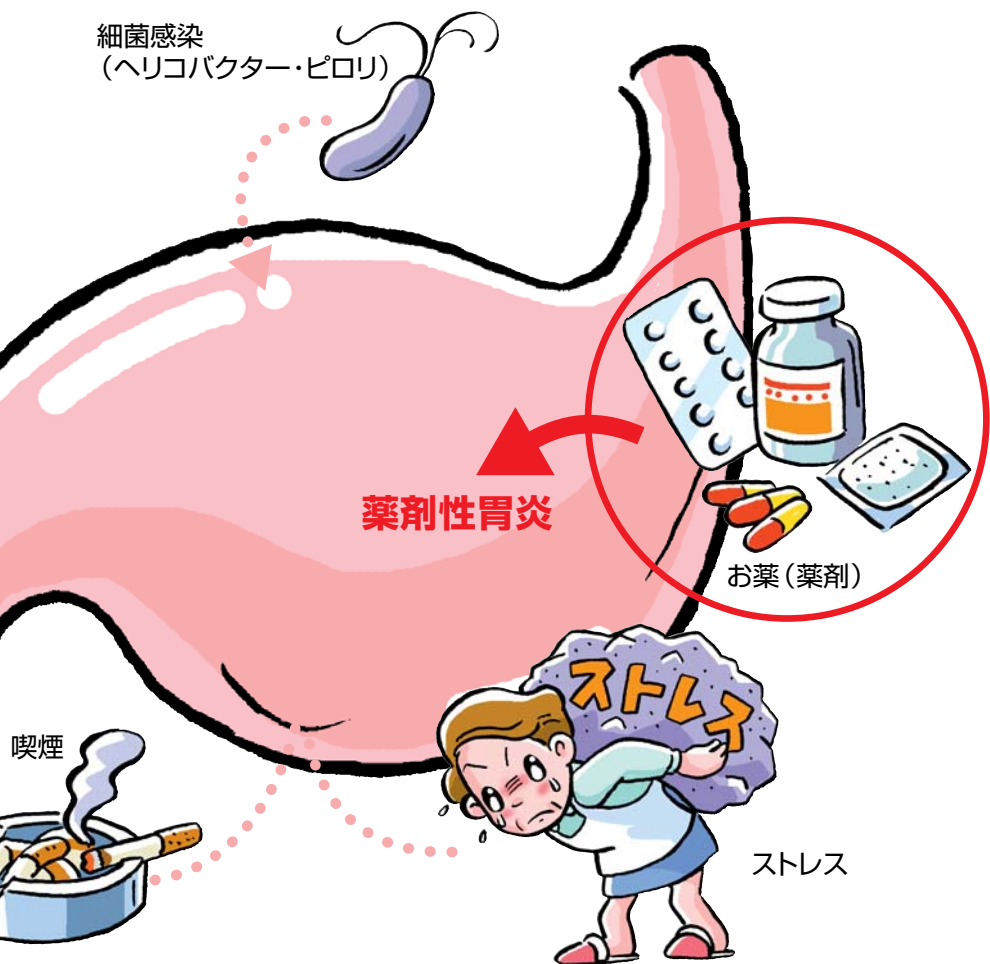
胃炎とは、胃の粘膜がただれたり、赤く腫れた^はりして、炎症を起こしている状態です。胃炎になる原因としては、ある種のお薬（薬剤）、アルコール（お酒）、ストレス、喫煙、ヘリコバクター・ピロリと呼ばれる細菌の感染などが考えられています。



アルコール（お酒）

このうち「薬剤」が胃におよぼす影響は大きく、胃粘膜に傷害を起こす原因の約半分が何らかの「薬剤」によるものだという報告もあります。この「薬剤」によって引き起こされる胃炎を“**薬剤性胃炎**”*と呼んでいます。

*“薬剤性胃炎”は俗称。医療の現場では、“薬剤性胃粘膜傷害”、“急性胃粘膜病変”、“急性胃炎”などと称される。



Q2



どのようなお薬が薬剤性
胃炎の原因となるのですか？

A

アスピリンやイブプロフェンなど「非ステロイド性消炎鎮痛ひ せいしょうえんちんつう薬やく」というお薬の中にも薬剤性胃炎を引き起こすものがあるようです。また、風邪薬やステロイド剤、抗生物質、抗がん剤の中にも薬剤性胃炎を引き起こすものがあるようです。「非ステロイド性消炎鎮痛薬ひ ねつちんつうやく」は、解熱鎮痛薬せいねつちんつうやくのひとつで、関節などの痛みをやわらげたり、炎症を鎮めたりしず、さらには発熱を抑えたりする目的で広く使用されています。最近では、胃の粘膜にあまり傷害をおよぼさない「非ステロイド性消炎鎮痛薬」の開発も活発に進められているようです。

Q3



薬剤性胃炎の症状とは どのようなものですか？

A

突然起こる激しい腹痛、悪心*、嘔吐、食欲不振、胸やけなどの症状があらわれることが多いようです。個人差もありますが、重症の場合は胃潰瘍に
まですすみ、吐血・下血など出血
をみる場合もあります。

* いまにも吐きそうなムカムカした気分



Q4



どうして薬剤性胃炎が 起こるのですか？

A

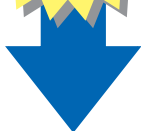
「非ステロイド性消炎鎮痛薬」などの消炎鎮痛薬は、からだの中で痛みの原因となる物質（“痛み物質”）*の生産ラインを止めることで、痛みをやわらげるという効果を発揮します。しかし、このお薬は同時に胃を保護する物質（“保護物質”）*の生産ラインまでも止めてしまうのです。このため、「非ステロイド性消炎鎮痛薬」を服用すると、胃を守る“保護物質”が少なくなるので、場合によって胃が荒れた状態となり、胃炎が起こりやすくなるのです。また、抗生物質の場合は、原因が明確になっていませんが、胃の粘膜への直接傷害が考えられています。



薬剤性胃炎が起こるしくみ

“痛み物質”
生産ライン

“保護物質”
生産ライン



非ステロイド性消炎鎮痛薬

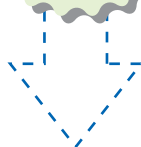


STOP

“痛み物質”の
生産中止

STOP

胃の
“保護物質”の
生産中止



痛みがやわらぐ

胃の粘膜が荒れる



Q5



薬剤性胃炎の対処方法や治療にはどのようなものがありますか？

A

対処方法

病気の治療で、どうしても「非ステロイド性消炎鎮痛薬」などを長期に服用する必要がある方は、注意が必要になります。胃の粘膜に負担をかけないように、「非ステロイド性消炎鎮痛薬」は食後にのむようにしましょう。

また、ストレスがかかると、胃の粘膜に悪い影響をおよぼします。気分転換をしたり、リラックスする時間を見つけるようにしましょう。

治療

薬剤性胃炎の治療では、症状が軽ければ胃の粘膜を守るお薬や、胃酸の分泌を抑えるお薬が用いられます。出血がある場合などでは、内視鏡を用いて止血を行うこともあります。



「お薬手帳」

を
活用しましょう

「お薬手帳」は、患者さんが今までのんだり、使ったりしたお薬の名前やのむ量、そしてこれまでに経験した薬物相互作用や副作用などを記録するための手帳です。

合併症のために複数の医療機関にかかることが多い患者さんでは、この「お薬手帳」があれば、医師や薬剤師は患者さんが今、どのようなお薬をのんでいて、過去にどのようなお薬で副作用を経験したのかがすぐにわかります。

「お薬手帳」は、あなたのかかりつけ薬局の薬剤師に相談すれば手に入れることができます。